

教職課程履修生における特別活動への意識変容と その考察

松 田 剛 史

Alterations in consciousness of special activities held by students in the teacher-training course, and consideration of these alterations

Takeshi MATSUDA

Abstract

While comparing the significance and purpose of special activities conducted in elementary and secondary education to student experiences, I have analyzed the learning processes through which students come to independently realize the curricular value of school education. I have focused my research on lectures regarding special activities that were delivered for the teacher-training course at different faculties of a non-teachers' college. I have created a comparative review of not only the activities proposed in these lectures but also students' learning attitudes. More specifically, I have examined the altering consciousness of students by qualitatively and quantitatively analyzing notes I wrote down on reflection sheets at each lecture, the perspectives I uncovered through group work and reports submitted by students. Through this thesis, I have attempted to clarify what type of value students in the teacher-training course have come to realize in regard to special activities and how they managed to realize this value.

1. はじめに

初等・中等教育における特別活動について、本領域がもつ意義やねらいを学生自身の経験と比較しつつ、学校教育における教育課程上の価値を自ら見出す学習過程を分析したものである。研究実践の対象となるのは非教員養成系大学の教職課程における異なる学科の特別活動の講義であり、その中での取組や学生の学びに向き合う姿勢等を相関的に比較検討している。具体的には、毎講義時に書き留めたりフレクシオンシートへの記入やグループワークで見出だした視点、さらにレポート記述などを質的・量的双方の分析から学生の意識変容を考察したものとなっている。これにより本論考では、教職課程履修学生が特別活動に対してどのような価値を見出だしたのか、その価値獲得プロセスの一側面を明らかにしようと試みたものである。

所属：

藤女子大学非常勤講師

a part-time lecturer at Fuji Women's University

2. 特別活動とは

現行の学習指導要領（平成 20 年および 21 年告示）では各学校種において以下のように目標が示されている。（下線は筆者が加筆）

「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。」（小学校学習指導要領第 6 章第 1 「目標」より）

「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」

（中学校学習指導要領第 5 章第 1 「目標」より）

「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」

（高等学校学習指導要領第 5 章第 1 「目標」より）

各学校種の発達段階をふまえた目標の示し方（筆者加筆の下線部を比較参照）にはなっているが、基本的な考え方としては「望ましい集団活動を通して、自己の能力を養う」こととした共通の目標を掲げている。

また、特別活動は学級活動（高等学校はホームルーム活動）、生徒会活動（小学校は児童会活動）、学校行事および小学校のみにあてはまるクラブ活動の 3 ないし 4 つの内容から構成され、各学校種における特別活動の目標はそれらを総括したものとなっている。

中学校学習指導要領（平成 20 年告示）解説の特別活動編によると、その目標は以下のように解説されている。

特別活動の目標は、特別活動の性格を明確にするために、その冒頭において、「望ましい集団活動を通して」という特別活動の特質及び方法原理を示し、それ以下において目標を具体的に示している。この目標は、さらに前半と後半部分に分かれ、前半部分の「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」においては、個人として、また、集団や社会の成員としての資質を身に付ける自主的、実践的な態度を育てるという目標を示している。また、「人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」という後半部分においては、人間としての生き方についての自覚を深めるとともに、現在及び将来にわたって自己実現を図る能力、すなわち、自己を生かす能力を養うという目標を掲げている。

ここで言う望ましい集団活動とは、輪を乱さず学級全員が一つの正解に向けて到達するというのではない。共に学ぶ単位集団としての学級や学年、学校という枠組の中で、実際の社会で生きて働く社会性を身に付けることをはじめ、児童生徒の人間関係を図るための重要な教育活動として位置づけられているのである¹⁾。

¹⁾ 原田恵理子ら「最新 特別活動論」大学教育出版（2016）

しかし、この目標は何も特別活動のみで達成できているのではない。各教科や総合的な学習の時間、道徳の時間といった教育課程内での学習活動をはじめ、生活指導や進路指導といった生徒指導の機能、キャリア教育や道徳教育の視点、中等教育における部活動、さらには地域教育や社会教育とつながりをもつなど、相互に連携・補完しながら個々の児童生徒が自己を生かす能力を養っていくものであることは言うまでもない。

3. 教職課程における特別活動論

教員免許状を取得する際の必要な修得単位として、教職に関する科目区分の教育課程及び指導法に関する科目に「特別活動の指導法」がある。小学校、中学校、高等学校の各学校種の教員免許状を取得する者は総合的な学習の時間や特別活動といった教科外活動での指導にもあたることができる。そのため、各学校種の免許を取得する者は教職課程において「特別活動の指導法」の単位を修得する必要がある。これは、養護教諭ならびに栄養教諭の免許を取得する者についても適用される。そのため、ほとんどの教員免許状の取得にはこの特別活動の履修が必須事項となっている。

ここでは、ある大学の教職課程における特別活動の指導法のシラバスを事例に、その実情について述べる。

対象：某大学3年次履修学生（3コマ）※中・高の各教科および栄養教諭の教員免許取得

- ・国語科、外国語科、社会科等の各教科免許取得希望学生のコマ（3学科合同：19名）
- ・家庭科の免許取得希望学生のコマ19名（単学科：18名）
- ・栄養教諭の免許取得希望学生のコマ10名（単学科：10名）

期間：2016年度前期（4月～8月）

授業計画（シラバス）：

- | | |
|------|--------------------------------------|
| 第1回 | オリエンテーション |
| 第2回 | わたしの特別活動をふりかえる |
| 第3回 | 学習指導要領から特別活動を読み解く①～特別活動の定義～ |
| 第4回 | 学習指導要領から特別活動を読み解く②～特別活動の意義～ |
| 第5回 | 特別活動という教育活動とは何か？！①～特別活動の実際～ |
| 第6回 | 学級活動・ホームルーム活動①～目標とその実際～ |
| 第7回 | 学級活動・ホームルーム活動②～活動の計画を立ててみる～ |
| 第8回 | 学校行事①～目標とその実際～ |
| 第9回 | 学校行事②～活動の計画を立ててみる～ |
| 第10回 | 生徒会活動①～目標とその実際～ |
| 第11回 | 生徒会活動②～活動計画を立ててみる～ |
| 第12回 | 全体計画作成①～特別活動の全体計画を考えてみる～ |
| 第13回 | 全体計画作成②～特別活動の全体計画を立ててみる～ |
| 第14回 | 全体計画プレゼンテーション～特別活動の全体計画を共有する～ |
| 第15回 | 特別活動という教育活動とは何か？②～特別活動がもたらす学びをふりかえる～ |

15回の講義の早い段階で、履修学生自らの小・中・高の児童・生徒時代における経験をふりかえる活動をし、特別活動に対する意識を自分に引き寄せたり、他者と経験を共有することで特別活動像をぼんやりながらも形づくった。これにより、学習指導要領を読み解く活動の際に自己や他者の経験と照らし合わせながらイメージを少しでも具体化できるのではないかとこの想定であった。実際、履修学生の意識としては少なからず学習内容の理解に役立った。

しかし、履修学生にとっては多かれ少なかれ特別活動に対する具体的なイメージはもちづらいという意識が大半であった。なぜなら、自らの経験では運動会や文化祭の役割決めや進路についての作業時間、

席替えの時間、果ては教科補習の時間などで消化されている実態が多かったためである。ゆえに特別活動、中でも学級活動やホームルーム活動での記憶はあまり残っていないのが実情であった。

そこで、学習指導要領の読み込みを通して、特別活動の意義や特質を認識し、児童生徒が価値ある学びを体得するための時間としていかに指導に当たることが大切かについて、ブレインストーミングやKJ法的な手法も適宜活用しながら自己の意見を導き出し、他者とともに練り合いをする対話的な場面も多く設定することとした。しかし、主体的で対話的な学びに不慣れな一部の履修学生にとっては、このような時間は戸惑うことも多く、また教職課程の特性上、他学部や他学科の学生も一緒に履修することもあることから対人関係的な障壁を堅持するようすもみられた。そこで学びの共同体を現出するために、主体的に人とかかわるしかけをしたり、逆に運命的な編成をする機会も取り入れるなどの配慮を随時行いながらグループの編成をおこなった。

4. 意識変容の分析

4-1 意識変容の見取りの方法

履修学生には以下の視点で特別活動に対する意識変容を見取ろうとした。

- (1) 毎講義時に各自が記入する自己評価活動シート「リフレクションシート」への自己評価
- (2) 講義中のグループディスカッション等による活動のパフォーマンス評価
- (3) 全15回の講義終了後に提出したレポートの記述内容

上記3つの視点から、履修学生それぞれが特別活動への意識をどのように変容させ、自らの指導に対する意識を高めていったかを見取ろうとしたものである。

4-2 履修学生の変容についての分析

4-2-1 リフレクションシート（ループリック）

学習者が主体的な学びのあり方を自ら見出だすための効果的な自己評価活動として、ループリックを活かしたリフレクションシートを使用した。講義終了の際の10-15分を使い毎時行なった。本取組は以下の3つの具体的な目的もっている。

- ①【自己と向き合う】主体的に学ぶ態度と人間性を養うための機会
(次期学習指導要領の改訂に向けた中教審の議論との関連性)
- ②【自己の能力を高める】認知スキル向上のためのふりかえり経験
(コンピテンシーベースの21世紀型能力の醸成)
- ③【自己の学びの軌跡を可視化】学びの現在位置を測るための道具

(ループリックを活用したポートフォリオ自己評価)

また、評価の観点と記入事項(視点)は以下の通りである。

- ・「学習状況」(右図上半分)と「目標達成」(右図下半分)の2つの観点から自己評価
- ・記入する事項は「気づきや学び、疑問点の可視化」(右図1-1)と「評価の根拠の記述」(右図1-2と2-2)の2つの視点

リフレクションシート(14)

2016年7月27日(水)

1-1 気づいたこと・学んだこと・疑問に思っていることなど(感想ではないので留意)

1-2 評価基準と個人評価(一あてはまる段階にチェックし、そう評価した理由を記述)

評価対象	A 学習の意義を理解し、可視化した気づきや学びを自らの日常の中で具体的に活かすイメージをもつことができた。	B 学習の意義を理解し、学習活動の中から気づきや学びを可視化(文字化や図式化)することができた。	C 学習の意義を理解し、学習活動の中から気づきや学びを可視化するまでは至らなかった。
チェック欄	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
評価の根拠			

2-1 今回の目標到達度について

評価 横断比較の結果を通して獲得した知識を共有し、自らの教科領域の質を向上させることができる。

2-2 評価基準と個人評価(一あてはまる段階にチェックし、そう評価した理由を記述)

評価対象	A 横断比較の結果を通して獲得した知識を共有し、自らの教科領域の質を向上させることができるまでであった。	B 横断比較の結果を通して獲得した知識を共有し、自らの教科領域の質を向上させるまでであった。	C 横断比較の結果を通して獲得した知識を共有し、自らの教科領域の質を向上させるまでには至らなかった。
チェック欄	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
評価の根拠			

学科名: _____ 学籍番号: _____ 氏名: _____

図1 リフレクションシート(例)

本活動は学習者である履修学生が自らの学びの状況や立ち位置（向き合い方）を確認するものであり、蓄積することで学びの軌跡を学習者自らが確認し学びを深めたり意識を高めたりするためのポートフォリオ評価材として活用できるようにしている。そのための機会として、15回の講義期間の中間と最後には学びの軌跡を自らふりかえる機会を設定している。ゆえにその性格上、成績評価には反映させることはない。

1-2については、1-1「気づきや学び、疑問点等」をどれだけ可視化できたかを自己評価し、その評価の根拠を示すというものである。評価段階は3段階とし、可視化できていればB、できていなければC、可視化できた者のうちさらに達成度の高い基準にまで達していたとする者はAにチェックを入れる。ここで大事なことはどこの評価の段階にチェックを入れたかではなく、評価の根拠欄に記述された理由が他者に対して納得を得られるものとなっているかどうかである。これは、21世紀型能力²⁾などでも示されている根拠に基づいて説得する力の醸成につながるものである。

ではこの自己評価した評価の段階はどのように変化していったのであろうか。「学習状況」「目標達成」とともに講義回が進むにつれて徐々に上昇し、自らの学びをしっかりと自己評価できていることがそこで明らかになるであろうと仮説を立てていた。では実際はどうであっただろうか。

そもそもこのリフレクションシートは以下の3つの要素が関連し合いながら構成されている。

- ・1-1「気づいたこと、学んだこと、疑問に思っていること等～感想ではないので留意～」への記述
→特別活動に対する意識の変容を読取るひとつの質的資料
- ・1-2 および 2-2 の評価段階へのチェック
→自己の学びの現在位置を測るためのツールでしかない
- ・1-2 および 2-2 の評価根拠の記述
→思考・判断・表現力の醸成に向けたツールである

その中でも今回は学習者が自己評価としてチェックを入れた評価段階そのものを量的に分析した。1-2「学習状況評価」における3クラスの値と、その平均値から見出させたことは次の通りである。それぞれの見取りの根拠は、1-1に記載されている質的データをもとにしている。

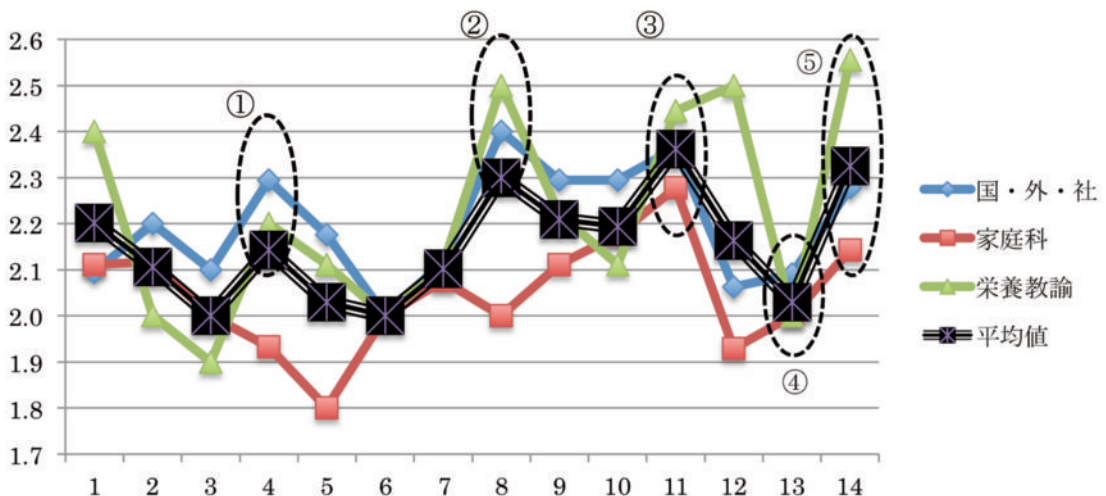


図2 学習状況評価

① 4回目は学習指導案の目標の読み込みおよびその解釈のグループ共有であった。難しい活動内容で

²⁾ 国立教育政策研究所「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」（2013年）で報告された研究で名付けられた「21世紀を生き抜く力」のこと

はあったが、学生個々が自ら学びへと向き合う最初の時間であった。そのため、1-1に気付きや学び、疑問点を経験から率直に書き表したことへの評価であると見取れた。

- ② 架空の中学校の設定（教員からの設定書が渡されている）をもとに、学年、学級、生徒や家庭、地域の実態を想定する作業をグループで行った時間であった。作業自体が多様な意見が出せたり、自らの経験や想定できることを多く共有したりできたため、目に見える形で気付きや学び、疑問点を記述することができたためと見取れた。
- ③ 学習指導案作成において最も苦労した「本時の目標」の設定をようやくクリアした後の活動回であった。そのため、本時の目標と展開とのねじれが解消し始めたり、具体的な授業の流れが見えてきたからではないかと見取ることができた。
- ④ これまでの講義回に比してインプットの時間が多かったため、気付きや学び、疑問点の記述が難しかったとのふりかえりが多かった。体験活動によって脳をアクティブにすることに慣れてきたからこそ、受け身の傾向にあるインプット授業に対して反動が出たのではないかと見取ることができた。
- ⑤ レポート作成に向けて自ら選択したテーマを他者と共有し、相互にコメントしたり執筆にあたってのヒントを見つけ合う時間であった。そのため、前回に比して脳をアクティブにする時間が多くあったことや、レポート作成に対しての意識を高めようとする姿も見取ることができた。

以上のことから、各講義回の学習内容や授業形態によって、学生の気付きや学び、疑問点についての記述の質には大きく影響を及ぼしていた。これは当然と言えば当然のことなのだが、だらしなく根拠のない評価や記述をしているのではなく、学生が学習に対してしっかりと向き合っているからこそその影響なのではないだろうか。このことは、講義回前半では他の2クラスと比べてなかなか学習へと向き合いきれず、グラフ上でも異なる動きを多く示していた家庭科免許取得クラスが後半では他の2クラスと同様の動きを示してきたことからもうかがうことができる。

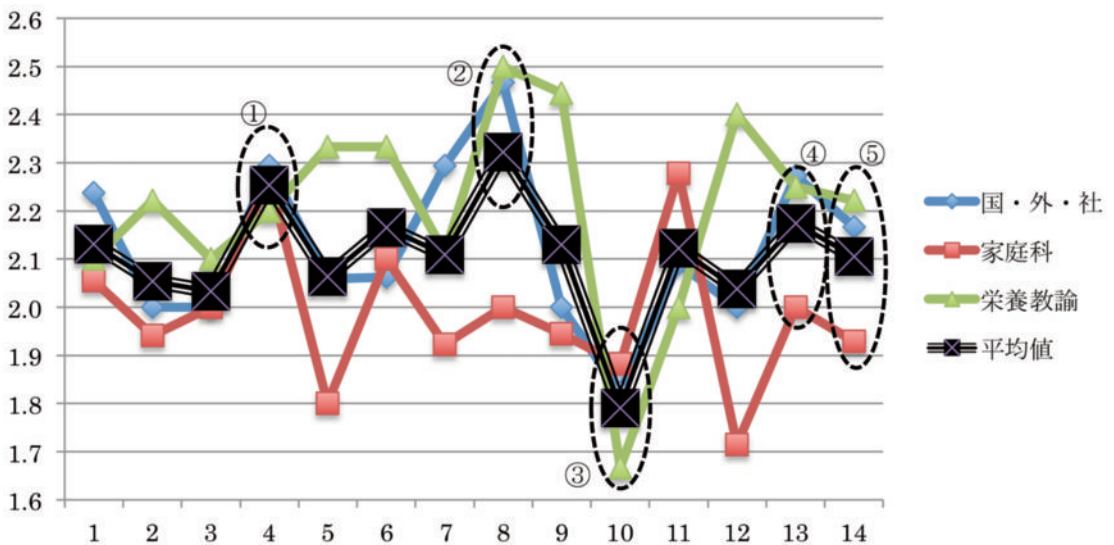


図3 達成目標評価

次に2-2「目標達成評価」について見てみる。

- ① 「学習状況評価」同様、4回目の活動への達成感とそれに伴う目標への到達を自らが体感できたことに依るものと見取ることができた。
- ② これも2-1と同様8回目の活動と目標到達が一致した結果であると見取れる。
- ③ ここは「学習状況評価」での11回目で得られた突破感の一步前となる10回目であるため、目標へ

の到達感に乏しい。やはり学習指導案づくりの本時の目標の設定への困難さからであろう。

- ④ インプット中心であったが、「理解」にまで至る目標の設定ではなく、「認識」レベルでの目標設定であったため、1-2 での評価ほど落ち込みは顕著ではなかったと見取れる。
- ⑤ 3クラスともに緩やかに下降傾向を示しているのは、本講義回の到達目標が「特別活動への気づきや考えを他者に伝え、納得させるための論点を構成することができる」と、少し高めレベル設定であったことが影響したのではないかと考えられる。

以上のことから、目標達成評価は学習状況評価と連動しており、その顕著な差異や傾向を学習内容や学習環境の質的データを参考に読み解くことで、学生の学びに対する向き合い方や意識の変容を読み取り、変容の兆しを発見したり確認できるツールとなりうるということが検証できた。

4-2-2 パフォーマンス評価

今期の特別活動の授業形態は、講義2・グループワーク6・全体ワーク2といった割合に大別することができる。中でも割合の高いグループワークにおける学生の活動のようすから見取る「パフォーマンス評価」についてここでは取り上げる。

パフォーマンス評価は、見取りたい場面や活動があった際にパフォーマンス課題を設定して取りまわせて学習者の取り組む姿(学力)を見える化し、ループリック(評価基準)を使って評価する方法である。今期の特別活動では7回実施している。(図4参照)

それぞれの活動の目標を講義冒頭で学生に提示して共有し、教員は学生の活動中のようすを観察法によって見取ったり、活動中のメモ(写真1参照)やワークシート等への記載内容を読み取ったりし、それらデータをあらかじめ作成しておいたループリックに照らし合わせながら評価をしていく。具体的には(図8のループリック参照)、教員が見取った学生個々への観察データをループリックの評価の段階と照合し、Aは6点、Bは4点、Cは2点として点数化し、学生の学習状況(学びのプロセスにおける今の立ち位置)を見取るツールとした。これは成績評価へも反映した。

講義開始当初から比べると小グループ内において相互に学びを深めたり、高い意識をもって活動に臨む姿がみられてきた。それに比例して、本講義の学習内容である特別活動への意識も高まり、自ら抱いていた疑問を自分自身で、もしくはグループ活動を通じた自分たちで解決していく姿がここからみられたことは、学生の特別活動への意識変容を見取る場面として有効であったのではないかとと思われる。

観 点	講義回	活 動
効果的なグループワークへの向き合い方	1	質問力ゲーム
	2	「わたしの特別活動」をふりかえる
学習指導案作成にかかわる意識	8	「生徒の実態」を想定する
	10	「本時の目標」を設定する
学びの共同体の一員としての意識	11	他のグループが作成した学習指導案を検討する
	12	学習指導案プレゼンテーション
	14	レポート作成に向けてのコメント

図4 パフォーマンス評価の観点と活動

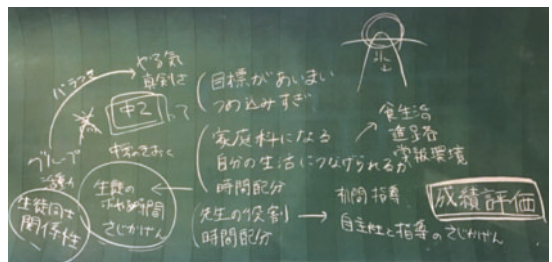


写真1 グループディスカッションでの学習者メモ

観点/段階	A	B	C
学びの共同体の一員としての意識	グループ全員にとって価値ある学びの場となるよう意識をもち、多面的な見方や考え方、比較、検索など創造的な学びの場づくりにかかわっている。	グループ全員にとって価値ある学びの場となるよう意識をもって活動にかかわっている。	グループ全員にとって価値ある学びの場となるよう意識をもって活動にかかわるまでは至っていない。

図5 ループリック(例)

4-2-3 レポート

最終的に特別活動の講義から得られたことや形成した考えなどをレポートにあらわす活動を展開した。これには提示されたテーマの中からひとつを選択して作成にあたることとした。あらかじめ教員側で効果的かつ汎用的に学びをアウトプットできるようなテーマ課題を9つ選定し、それらを各々の関心や特別活動の学習の集大成として有効であると学生自身が判断したのを選び、執筆に臨んだ。以下は学生へと提示したテーマ一覧と執筆にあたっての留意点である。(テーマ後ろの[]数字は選択した学生数)

【テーマ】 ※一つを選択し、そのテーマに応じたタイトルを付けて執筆する。

- 1 特別活動不要論 [2人]
- 2 学級活動の効果的な学習活動の展開 [4人]
- 3 生徒会活動と学校行事の意義と価値 [4人]
- 4 特別活動とカリキュラム・マネジメント [3人]
- 5 特別活動における望ましい集団の形成と個の成長 [15人]
- 6 特別活動における社会的な資質の育成 [2人]
- 7 特別活動における自主的、実践的な態度の育成 [10人]
- 8 特別活動における人間としての生き方の自覚と自己を活かす能力の育成 [2人]
- 9 特別活動の可能性 [5人]

【執筆体裁】

- ・体裁は一般的な小論文や研究レポートの執筆体裁に準じる。
- ・上記テーマより1つを選び、そのテーマに応じてまずは執筆者(自己)の主張や考え方、立場、捉え等を明示し、根拠や引用を用いながら論理的に記述していくように留意する。
- ・引用や出典は一般的な小論文(レポート)と同様に引用作法や出典の明示など留意する。

体裁 (小論文)	①レポートを提出している。(1点)	②感想文ではなく、レポートとしての体裁が概ね整っている。(1点)	③テーマに沿った構成となっている。(1点)	④根拠を伴った自らの意見が適切な表現で説明されている。(1点)	⑤出典や引用等が適切に記載されている。(1点)
内容 (特別活動)	⑥特別活動にかかわる内容が記載されている。(1点)	⑦特別活動の内容が捉え違いなく執筆している。(2点)	⑧特別活動の講義で学び得たことや自らの意識変容等をふまえて執筆している。(2点)		

図6 観点別の評価基準

選択したテーマは多い少ないはあるものの全てに該当者がいた。どれを選んでもおそらくまとめとなる点は同じになるからどれを選んでも一緒だという声も学生からは聞かれたが、結果はもちろんそうはならなかった。また、レポートの執筆に際し学生には改めてその作法や体裁等を指導した。

提出されたレポートは成績評価となるため、図6のように観点別に評価基準を設定して判定をおこない、10点満点で評価した。履修学生全47名の点数分布は図7の通りであった。評価①と⑥は基礎点

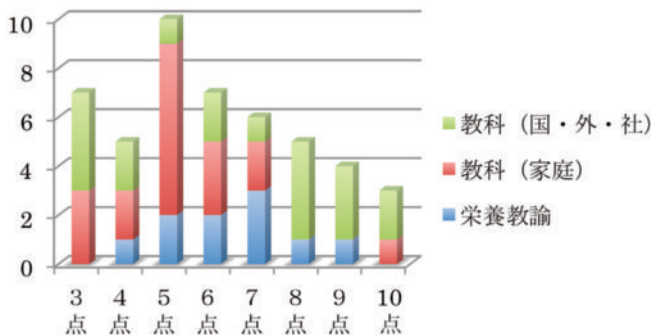


図7 レポート点数分布

的な扱いであり、レポートが提出された段階でほぼこの2つの点については得点としてマークされる。そのため、点数分布において1点ないし2点の分布は削除した。

3つのクラスを全体で集計して見ると、4点でややへこみがあるものの概ね5点を中心に正規分布の様相を示した。取得免許別に見ると、国語科・外国語科・社会科の学生はハイスコアとロースコアに分散するやや二極化の傾向にあり、家庭科の学生はロースコアに偏るといった傾向が見られた。栄養教諭は概ね正規分布の様相を示している。とは言え、観点別の評価基準ごとにマークしたか否かの詳細データの分析をすることが、最終的な学生の意識の変容を捉えるひとつのデータとなったであろうが、合計点のデータしか残しておらず誠に残念である。

5. 見取れた変容について

これまで述べてきた事例や活動の側面から次のことが見えてきた。

- ・特別活動に対する自己の経験からのイメージが崩れ、その重要性を見いだしたふりかえりの記述が、講義回を重ねるにつれて増加したり、授業内での活動においての意欲的な姿勢に結びついていたことは十分に見取れた。しかし、その気づきが学校現場で行われている特別活動の現状とリンクしないことはジレンマとして残っている学生も少なからず存在した。これはまだ学校現場の実態を未経験であることもあげられるが、教育実習を控えた学生にとっては課題意識をもって臨むことにもつながるといった効果もあるのではないかと感じられた。
- ・小グループで学び合う場面を多く設定することによって、相互に学びに向き合う姿勢や意識を高めることができる。しかし、これはマイナス面においても影響がみられ、意識が高まらない学生にグループ内の他の学生が引っぱられ、学びへ向き合うことへの意識の低下を招く。これには前提として、指示が的確に届いたり、問いが自分の中にしっかりと理解されていたり、また適切な学習環境の整備を教員が行っていることがあった上で、学生への個別の状況に合った指導がなされることが重要である。
- ・グループワークを学習活動の中心に据えることによって、自ら獲得した知見や他者から得られた新たな視点を自分のものとし、それを活かしたり、さらに追究したりする意欲や態度を効果的にはぐくむことができる。習得・活用・探究の学習視点が具現化されたとみられる。レポートを作成することにより、活用・探究の部分がさらに刺激され、自らの学びを深めたり広げたりまた他の学習や日常生活においても活かす意識や態度も醸成することにつながっている事例もみられた。

6. おわりに

特別活動への意識変容について今回は分析をした。しかしこれは何も特別活動だけにあてはまることではない。身に付いた学びへの向き合い方や考え方が学習内容や事象に対するの関心を高め、追究へと誘う効果的な学習のスパイラルがうまく作動したに過ぎない。ゆえに、特別活動への意識変容は、学びに対する意識変容と捉えることができる。

また、特別活動は自主的、実践的な学習という特性をもつことから、今回の「ルーブリック」「自己評価活動」「パフォーマンス評価」「ポートフォリオ評価」「少人数によるグループ活動」「レポート活動」などを有機的に組み合わせた実践は、学生の意識変容を促し、それを学習者・教員双方が見取り、特別活動の学習はもとより、他の学習や日常生活で活かすことにもつながる事例のひとつとして、少なからずの意義があったのではないかと考える。

コンピテンシー・ベースの確かな学びを学習者自らが意識し、それにより獲得できた知識、資質・能力、態度を日常の中でいかに適切に使っていただけるかは、持続可能な社会づくりを担う市民としてとても大切な学びのプロセスではないだろうか。そのプロセスを実社会に羽ばたく前の初等・中等教育において実際的に経験できる場として機能する特別活動がもつ意義は相当大きいものとなるのではないだろうか。

参考文献・資料

- 文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別活動編」東洋館出版社 2008年
- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 特別活動編」ぎょうせい 2008年
- 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 特別活動編」海文堂出版 2009年
- 文部科学省教育課程課「中等教育資料 No.953」学事出版 2015年
- 原田恵理子, 高橋知己, 森山賢一, 加々美肇「最新 特別活動論」大学教育出版 2016年
- 天笠茂「中学校新学習指導要領の展開 特別活動編」明治図書 2008年
- OECD教育研究革新センター「メタ認知の教育学 生きる力を育む創造的数学力」明石書店 2015年
- P. グリフィン, B. マクゴー, E. ケア「21世紀型スキル:学びと評価の新たなかたち」北大路書房 2016年
- 石井英真「今求められる学力と学びとは— コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影」日本標準 2015年
- 田村知子, 村川雅弘, 吉富芳正, 西岡加名恵「カリキュラムマネジメントハンドブック」ぎょうせい 2016年
- 田中耕治「新しい『評価のあり方』を拓く」日本標準 2010年
- 西岡加名恵, 石井英真, 田中耕治「新しい教育評価入門」有斐閣 2015年
- 松下佳代「パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する」日本標準 2007年
- 三藤あさみ, 西岡加名恵「パフォーマンス評価にどう取り組むか—中学校社会科のカリキュラムと授業づくり」日本標準 2010年
- 安彦忠彦「『コンピテンシー・ベース』を超える授業づくり」図書文化 2014年
- ダネル・スティーブンス, アントニア・レビ「大学教員のためのルーブリック評価入門」玉川大学出版部 2014年
- 小野田博一「13歳からの作文・小論文ノート」PHPエディターズグループ 2010年
- 国立教育政策研究所「資質・能力 理論編」東洋館出版社 2016年
- 国立教育政策研究所「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」2013年